

出来過ぎた娘

飯沢

匡

雪華社

出来過ぎた娘

飯沢

匡

雪華社

出来過ぎた娘

一九六七◎

昭和四十二年五月十五日印刷

昭和四十二年五月二十日発行

定価／四五〇円

著者／飯沢 匡

発行者／栗林 茂

発行所／株式会社雪華社

東京都中央区京橋一ノ七

電話／五六一一六八三八

振替／東京四二一五〇番

印刷所／三恭印刷株式会社

製本所／富士製本株式会社

目 次

出来過ぎた娘……………	5
ゴリラの私事権 ^{フライバシー} ……………	27
コレクター……………	51
偽の下宿人……………	75
善童子……………	101
石が浮かんで……………	125

英雄的な夜……………151

長い長い長いまつ毛……………177

男と台所……………201

臭い金……………225

あとがき……………267

出来過ぎた娘

拙宅の和時計——徳川末期の手造りの時計が故障した。この時計は骨董品で本来そう正確なものではない。しかし出入りの近藤君という時計屋さんが、すっかり手を入れて呉れて以来、装飾品から実用品に格上げされ、書齋で私に時間を教えてくれるようになったのである。それが、動かなくなったので私は大いに不便した。家人は私の命により、兼て近藤君から教わってある通りの電話番号で、「来てくれ」とかけたのだったが、電話口に出て来た妻女らしい人が、いとも冷たく「主人はもう家にいないので御用は承れません」といったというのである。それを聞いて私は

「一体どういふことなんだ、もう家にはいませんというのは！」

と中っ腹でどなった。家人は

「旅行ですかと聞いたんですけど、何んだか言葉を濁すの。女でも出来て家を放り出してしまったんじゃないかしら」

と不穏なことをいい出した。細君は何でも家庭に異常なことがあれば、それは全部一家の主人たる良人に罪があると固く信じている女性であるから、近藤君の場合を援用して私を暗に戒めるつもりらしいのである。そういう気配を察したので私は語気も強く

「あの近藤君に限って女を作るなんてことは考えられないね。第一、女の出来る面かというんだ」

と少々、酷なことをいってしまった。だが、事実、面だけでなく、全体の印象からいって女と出奔する男性は、どこかにもう少し魅力的な点がある筈だ。我が近藤君は、全く時計屋という、正確さや身上とする職業には打ってつけの男、という感じを身体全体から発散している人間であった。角張った下顎骨といい、骨っぽい体格といい、髭の剃りあとの濃い頬といい、金壺眼かなづぼまなこといい、どれを挙げても堅物という印象に役立つものばかりだ。

「でも男なんて当てになりませんよ。あの八百屋の親爺さんだって、二十も年下の女とあんなことになったじゃありませんか」

と細君は手近な例を引用した。確かに八百屋の親爺は天理教に凝っていて堅物に見え、それが、近所のパン屋の手伝い女と心中未遂をやったのである。

とも角、私にとっては近藤君に女が出来たにしろ、出来ないにしろ、それ程、問題ではなかった。私は和時計が直るものなら直したかったし、直らないならこの際思い切ってラジオの時報に自動的に合うという、正確無比な電気時計を求めるつもりでいた。それには、一度、近藤君に来宅して貰い、和時計を診察して欲しかった。家人は、私が時計が動かないあまりイライラするので、やむなく頭を働かしたらしく、方々の会社の厚生部に電話した。近藤君が、かなり沢山の会社に入入りして、出張販売と修理をやっていることを話していたからである。そしてやっと近藤君と連絡をつけたので、律義な近藤君は、朝早く出張販売の前に拙宅に来てくれた。

「どうしたんだい？ 家へ電話したけど君はもう家にはいないという返事だったよ」

と私がからかい半分にいうと、何と近藤君は、俯いてしまい、何とも返事をしない。しかも、はらはらと涙をこぼしたので、私はすっかりあわてた。もう少しで、「女でも出来たのか」と冗談をいうつもりだったが、差控えてよかったと私は思った。

「私は家出したんでございますよ」

と近藤君はいった。

（やっぱり女か！）

と私は合点し、泣いたのは今となつては自分の早計を嘆いているのだと解釈した。

「原因は？」

「原因は女どもです！」

（おやおや「ども」とは複数か！ この男もなかなかやるものだ）

そう思いながら、私はこの男のどこにそんな魅力があるのかと見直した。だが依然として、女とは凡そ縁のなさそうな男のままだ。しかし、ある種の女性にとってはこういう男性も、何か引きつけられるものがあるのか、と女心の不可思議さは、到底、男には計りかねると思っていた。

「今どこに住んでいるの？」

「×××マンションです」

と、これはまた有名な高級マンションの名をいったので、私は混乱した。

（女とあの高級マンションに住んでいるとは豪勢な！ さては金蔓かねづるのついた婆さんとも出来たのか）

と至って常識的なことを私は想像したのだったが、それは総て外れた。

「私は独りで暮しています。もう女は懲り懲りです。死ぬまで独りで暮します。その方がどれくらい気が楽か知れません」

と溜息まじりにいう近藤君の顔付は、浮いた話でないことは、もうはっきりしていた。

二

近藤君の話によると、事の責任は三人の娘と細君にあるという。

近藤君が時計屋になったのは、本当は電気の学者になりたかった志望が、家が貧乏なるが故に叶えられず、いくらかでも電気とか機械に近い職業として選んだものだったのだ。そういえば、以前拙宅でテープレコーダーを逸早く求めた時にも、熱心にその機構を調べていたのを憶い出す。ラジオもテレビも、全部自製してしまうという話を聞いた時、私は暢氣のんきに「時計屋さんも機械屋のうちだから」と簡単に考えていたが、近藤君の心の中には四十男になっても、より高い機械の世界へ近づきたい志望は消えていなかったというわけなのだろう。

彼は礼儀正しい人間であつたが、しかし、時々、世の中の不正について激しい口調で物語ることがあつた。実は、これも彼が本来なら一介の街の時計屋で終る筈の男でなかつたという残念さが、そうさせるのだつたのだろう。彼は今では、時計屋として大成功しているといつてよいのだが、自分自身としては志を得なかつた人間という不満足を持ち続けていたのだろう。

そういう彼の家に三人の娘が生れた。小学生の時には問題はなかつた。近藤君は、長女がよく勉強もしないのによい成績を挙げるのを自慢にしていた。近藤君は、喜んで長女の算数や理科の指導もしてやつた。長女はその限りでは父親を尊敬しているらしかつた。中学に進むと長女は際立って数学に秀でていることを示し出した。数学の教師がこの娘に数学部という同好者のグループを作らせ、そのリーダーを任せたりから、長女は、ひどく数学に興味を持ち、中学三年生の時には高等数学に深入りしていた。数学もこうなると歌と同じで、歌の上手な子は教えなくても、ひとりで進境を示すように、長女は自ら上級の数学書を漁り出し、どんどんそれを咀嚼して自分の物にして行つた。

「お宅の娘さんは天才です。まあ何万人に一人という頭腦の持主ですね。是非、学問をやらせたらよいでしょう」

と校長が母親にいつた時に、母親は有頂天になつた。もうこのころになると、近藤君の数学の力では娘の数学には太刀打出来なくなつていたが、好学心の強い近藤君は、娘の登校中に密かに娘の本を讀んで、結構、娘に追いついて行つた。最初はそれも出来たが、父親は仕事の合間であり、そうそう

学ぶ時間もない。ついに娘の跡を追うことは断念せざるを得ないことになった。

高校に進むと、娘はすっかり自信を持ち、数学に没頭することは自分の権利と思うようになった。

母親も喜んで、娘には家庭内の雑事はさせないように心配りをするのだった。近藤君が

「おい、正子、ビール買って来てくれ」

と、故意に長女を指名して使いにしようとしても、長女の正子は何やら複雑な記号を書き散らして、父親の言葉なんぞてんから耳にも入らない様子である。

「私が行って来ますよ」

と細君はいうが、近藤君は

「何も、お前に行くことはない。少しは家の手伝いもなくちゃいけない。こら正子！」

とどなる。正子は、やっと振り向くと顔をしかめて

「人が折角集中している時に、変な雑音立てないで」

と叱りつけるようにいう。もはや、その口調は父親に対する娘の言葉ではなく、女王が股肱の臣に不機嫌を投げかけているようなものである。

「何んだ。それが父親にいう言葉か！」

と近藤君はすっかり怒り、手をあげたが、すぐ母親がとめた。

「おやめなさい、みっともない。だからお父さんは職人だといわれるんですよ」

「何？ 職人？ 誰がそんなこというんだ？」

と近藤君はますますいきり立った。大体ビールを飲もうと考えたのも、出張先きの会社で、若い小僧っ子みたいな社員が商品へ文句をつけて、やりあったその不快さをまぎらせたかったのである。その社員は何カ月月賦で上等な時計を求めた。大体、身分不相応の品物を買うのでとめたのだが、どうしてもそれだと金張のスイス製を持って行ったが、二週間もすると動かなくなったといつて、つき返して来た。開けてみると、はめたまま、海水浴をやったらしく、内部はすっかり赤錆だらけになっていた。

「あなた、何もしないのに動かなくなったとおっしゃったけど、こりゃ塩水につけたんでしょ？」

「完全防水といったじゃないか」

「防水というのは、海水浴のことじゃありませんよ」

「完全防水というから、こっちはそう思ったんだ」

三

（全く、このごろの若いものにあっちゃ、かなわない！）

結局、その高級スイス時計は手の入れようもなかったし、彼は後の月賦は払わないという。完全に近藤君の敗北である。そして家へ帰ってみれば、父親を職人呼ばわりして恥じない娘は数学に没頭し

て家事もやらない。そして、正子をぶん殴って以来、正子は父親と全然口をきかなくなってしまった。父親も意地で同様にして時は過ぎて行った。

長女の正子は三年間高校の首席を通し、大学は女子学生は珍しいという物理学科に悠々と入学した。この大学入学に近藤君は別に反対しなかった。もうすっかり親としての愛情を感じていないのに、やっぱり職人の娘が最高学府に堂々と入学するという榮譽には、大いに魅力があった。娘と口をきかないという間柄なのに、母親が中に立つと喜んで学費は出したのである。

長女が、こんな才媛であるから、続く妹も、「あの天才の妹」というので学校も注目するし、本人も頑張るので、これまた学校の成績は抜群であった。この次女は数学には向かなかったが、英語がずば抜けて得意で、大いに頑張り、首席を通したわけではないが、首席になったこともあるのである。

三女は性向としては長女によく似て居り、数学が得意であった。

これは一度も首席にはならなかったが、かといって成績不良ではなかった。長女と異なることは絵画が好きで、将来は建築家になると早くからいっていた。

この三人の娘は全くよく一致団結していた。というのも、長女のリーダーシップがよかったからであらうが、近藤姉妹というと中学でも高校でも模範的な生徒で、男子生徒も尊敬を払っていた。特に美人というわけではないが、別にみっともない顔立ちではない。これは多分、母親の血を引いたからであらうが、しかし、この三人の姉妹はボーイフレンドが出来なかった。長女は男性を軽蔑すること

を最高目的としているようであった。父親の耳に入ること十分に意識した上で

「男なんて勝手に弱いものよ。いよいよ敵^{かた}なくなると、暴力っていう奥の手を出すんだから。暴力が物を解決すると信じ込んでいる連中なんか、相手には出来ないわ」

と、聞えよがしにいうのであった。そうすると、次女も三女も、それに和して男性の非を鳴らす。しまいには、ただ人のよいのが取得のような母親まで、一緒になって男の悪口をいう。

近藤君は、ただ不快になるばかりである。近藤君は最近出入りしているある会社の社長が、骨董屋に騙されたのか、清朝の宮廷にあったという飾り時計を一括して二十ほど求めたのを修理したのだ。この時計はフランスの宣教師たちが清朝の皇帝たちの歡心を買うために贈呈したというだけあって、珍奇なものであった。金色燦然^{さんぜん}としている上に、ゼンマイで色々な仕掛がしてあり、一定時間が来ると人形が芸をしたり、人工のガラス細工の噴水があたかも水を噴上げているように見えたり、小鳥が歌ったりという精巧なものであった。それが錆びついて動かなかったのを全部動くようにしたのであったから、社長は大いに喜び、社長室の飾棚に並べて大いに自慢したから、往訪の新聞記者、雑誌記者も興味を持ち、自然近藤君の腕前も話題になり、NHKの「私の秘密」に登場した。

流石の「私の秘密」のレギュラー・メンバーも、この秘密は当てられず、鐘が鳴ったりで、近藤君も大いに面目を施したのであるが、三人の娘はどういうわけか御機嫌が悪く、てんから話題にしようとしてもしない。母親はテレビ局まで随って行って観客席で見たが、家で留守した三人娘はテレビを見た